

大正期谷崎潤一郎論

——谷崎小説作品と社会との接点をめぐる研究——

駒木 結

本修士論文においては、谷崎潤一郎の大正期までの作品を主な考察対象とし、作品から読み取れる同時代思潮との影響関係を検証しながら、谷崎の文学的基盤となった思想の再検討を試みることを目的とする。

第一章「秘密」論 明治四〇年代の検閲と権力への抵抗——では「秘密」を取り上げ、検閲の問題を視野に入れながら強権政治からの逃亡とその葛藤について論じた。

大正期の谷崎は検閲を意識せざるを得ない状況にあり、検閲者に対して抗議している。しかし、当時の検閲への反発が「芸術上の問題」として抗議される傾向にあったことに對し、谷崎は、検閲規程が無意識に内在されてしまうことを問題視している。そういった権力の内面化について描かれたテクストとして、「秘密」は読むことができる。

「秘密」の物語におけるポイントは、「郊外へ隠遁するよりも、却つて市内の何処かに人の心附かない、不思議なさびれた所がある」という主張に集約される。「秘密」の語り手は、知っているはずのものを真新しく感じる感覚に新しい世界を求めている。すなわち、既存の現実を別の角度から眺めることによって開ける新しい「別世界」を見出したのである。それは、T女との関係を象徴する「精美堂」によって最も顕著に示され、しかしそれが結局T女の視点を介したことによって「別世界」のように感じさせられていただけであったことに気付いた瞬間、男の夢想は終わってしまった。

思い返せば、幼少期に感じた「別世界」も、父親に導かれる形で発見した「別世界」だったのであり、無意識に他人の視点を自分のものとしてしまう点が共有されている。最後に付された「二三日過ぎてから、急に私は寺を引き払つて田端の方へ移転した。私の心はだん／＼「秘密」などと云ふ手ぬるい淡い快感に満足しなくなつて、もつと色彩の濃い、血だらけな歓楽を求めめるやうに傾いて行つた。」という後日譚からは、そういった視点の無意識下での内面化を拒否する意志を読み取ることが可能である。

明治四〇年代の検閲をめぐる言説空間を考えたとき、その状況を問ひ直す可能性を秘めたテクストであったことを指摘した。

第二章「独探」論——疑似空間の先にあるもの——では「独探」を取り上げ、言語の問題に注目しつつ、外国との関係において自国を捉えるという視点から、谷崎の「オリエンタリズム」について再考した。

谷崎の作品にはたびたび外国文学が直接にも間接にも引用されるが、後に谷崎自身が「私はその時代の自分の作品が一番イヤだ。」（「正宗白鳥氏の批評を読んで」『改造』一九三二年七月）と振り返ってしまう通り、特に初期の作品に現われる西洋趣味は、そのすべてが巧妙なものではなかつたかもしれない。しかしその純粹な興味関心にこそ分析されるべき思想の基盤が宿っている。「独探」は、西洋趣味が極端に描かれた大正初期の作品であり批判的な評価が支配的だが、西洋趣味の底の浅さにはなく、異国に興味を持つ姿勢について分析を行ううえで格好のテクストであると捉えた。

「独探」の物語の中心は奥太利人G氏とタニザキ氏との言語習得をめぐる交際にある。ここでのタニザキ氏の言語習得に対する姿勢やG氏とのやり取りからは、谷崎の言語観を抽出するヒントが得られる。それは、その言語・国全体をまるごと体に植え付けることが肝要という言語観である。そして、異文化の完全な摂取は困難であることをG氏で表現することによ

り、タニザキ氏の外国語習得が不能に終わる必然性が担保されている。異国であるというだけでそこには果てしない相容れなきが立ちほだかつているということがG氏とタニザキ氏の交流によって明らかとなった。

さらに「Russian Bar」での女達との交流という異文化交流の場も設定され、ここではG氏との交流とは対照的に非言語的コミュニケーションが求められる。ここでタニザキ氏は、文化と不可分である言語を取り去った関係を築くことにより、それまでの無条件な西洋優位の思考を無効化する。文化を優劣関係ではなく、ただの異なるものとして見る視座を得ることで、安易なる模倣・迎合によって作られる似非的な異文化摂取を越える可能性を浮上させた。

したがって、「Russian Bar」での交流を経たタニザキ氏はもはや言語習得の目的を放棄し、代わりにエキゾティシズムの根源を探ることに興味を持つ。外国語習得の限界や不可能性を意識し、文化の優劣観を無化する思考を手に入れたとき、そのエキゾティシズムが自国にも見出せる視点を発見する。ここに、「独探」における異文化交流表象の特異性を見出した。

第三章「魔術師」論―谷崎潤一郎が描いた「群衆」―では「魔術師」を取り上げ、大正デモクラシー的風潮において問題視された「群衆」の存在に注目し、現実と虚構の関係について論じた。

「民本主義」をめぐる議論においては、非理性的存在である「群衆」を理性的「民衆」へ教化していくことが求められていた。そしてこの「民衆」「群衆」をめぐる議論は、日本が西洋と肩を並べて近代資本主義競争を勝ち抜いていくためにも不可欠と思われていた。そして「魔術師」には、一連の「群衆」言説を意識したような「群衆」の存在が印象的に描かれている。

この「群衆」の姿は大山郁夫が提出するそれを模倣している。しかし、「魔術師」との関係を「私」と「彼の女」で描き分けることにより一連の「群

衆」言説からの逸脱も示唆されている。「彼の女」は一貫して「群衆」化を拒否する立場として描かれているのに対し、「私」は最終的に「群衆」化を受け入れる。この「私」が受け入れた「群衆」とは、エリアス・カネッティの言う「開いた群衆」である（『群衆と権力』（原題『MASSE UND MACHT』一九六〇年、邦訳は一九七一年三月、法政大学出版局）。「開いた群衆」とは、それまでの馴致された「閉じた群衆」が、新しくより優れた種類の組織を形成するために運動を行うようになったものであるが、現実を凌駕する世界として描かれる「魔術の王国」内で、彼らはまさしく「開いた群衆」と化した。すなわち「新しい現実」を切り開くために必要な「群衆」のエネルギを「魔術師」では表現していると言える。

第四章「小さな王国」論―大正七年前後の「貧困」をめぐる問い―では「小さな王国」を取り上げ、当時の貧困問題について同作品が先見的な視点を提示していたことを論じた。

一九一八年の日本は近代資本主義のひずみに対する不満を内包していた。第一次世界大戦による物価高騰のおりを受け、物価に見合った賃金上昇を見込めなかった労働者の生活は逼迫し、遂に米騒動が勃発する。

この米騒動と時を同じくして「小さな王国」は発表された。そこには貧窮する教師の様子がつぶさに描かれており、時代相をよく反映している。

当時の言論界を牽引していた吉野作造も、この作品にすぐさま反応を寄せた（『我国現代の社会問題』『中央公論』一九一八年一〇月）。

あるいは、その後起こった武者小路実篤による「新しき村」運動も既存社会への疑念から生まれた活動である。同時期における社会の閉塞感や困窮による逼迫感、河上肇の「貧乏物語」の衝撃にも象徴されるように、社会全体に問題意識として根付いていた。そこで「小さな王国」が浮彫りにしたのは、社会的に構築された貧困であった。

「沼倉共和国」が顕在化したのは「百貨店の欲望による消費行動」であっ

たが、それは「相対的貧困」に帰着する。当時の貧困研究で可視化されていたのは、「絶対的貧困」のみであり「相対的貧困」は不可視の存在であった。しかし「絶対的貧困」が深刻な問題であることと同等あるいはそれ以上に、「相対的貧困」も社会問題として認識されねばならない。そこで注目されるのは、物語の発端である貝島一家の移住が引き起こされたのも、「何処其処のお嬢さんが着て居るやうな洋服が買つて欲しい」という、周囲との比較による相対的な貧しさに耐え得ざる感情によっていたことである。「相対的貧困」に苦しむ貝島という設定が最初から付与されている点と、その貧困は「沼倉共和国」の存在によって解消されるかに見えて実はそうではない点が重要である。いくら啓太郎が「沼倉共和国」から餅菓子や扇子を手に入れてきたところで、貝島一家の生活は向上しない。最終的な貝島一家の貧困の問題は生命維持という最も基本の部分である。しかしその生活に必要な物資の水準までもが足りあがつているということがここでは問題である。仮に生物学的には生きられても社会的には生きられないということが、貝島の苦しみによって浮彫りになる。そこには、社会的な制約のなかで生きる人間の姿を読み込むことができ、それは社会と人間の関係を問うきっかけともなり得る。

「小さな王国」は、発表当初から社会問題に言及した作品として評価された作品であるが、より詳細に検討すれば、同時代言説をずらしながら取り込むという谷崎独自の社会へのまなざしが見出せる。その意味では、「小さな王国」だけが際立って社会的な作品なのではなく、一章から検討してきた作品と特徴を共有し、その系譜に位置づけることができるだろう。

以上の考察から、大正時代の谷崎作品に社会へのアクチュアルな視点を見出した。社会や政治への関心が薄いと評価されることもある谷崎において社会との交点を具体的に見出したことが本論文における成果である。ただし、こういった社会へのまなざしがより具体的なテーマの中で掘り下げ

られていない点に本論文の課題がある。今後の研究においては、本論文で取り上げた作品群にも共通する広い意味での「教育」をテーマとして設定し、谷崎の作品が学校や教育の変遷とどのように関わりを持つかについて考察を深めることを課題とする。

小野篁逸話とその享受をめぐる研究

戸澤紫穂

平安時代の公卿小野篁とその異母妹との恋愛を描いた『篁物語』（『小野篁集』）は篁にまつわる逸話を多く含んでおり、ときに既存の逸話を脚色し、ときに新たな逸話を生み出しながら、他の作品には見出せない篁像を描いている。そこで本論文では、篁逸話の成立・享受について論じるとともに、『篁物語』における篁の人物像を問い直すことを試みた。

第一章では、『篁物語』の享受の問題を再検討した。従来、『篁物語』は十六世紀以降、その所在が不明となったと想定されてきた。この問題について、逸話の享受という観点から、新たな可能性を提示した。

まず、篁逸話の話型を私に分類したところ、次の七つの型（さらに細かく分かれる場合は系統）を立てることができた。

- ・「才能型」…篁の非凡な才能が称えられる
- A系統…学問の才能
- B系統…和歌の才能
- C系統…芸術の才能
- ・「隠岐配流型」…篁が天皇（上皇）の不興を買ひ、隠岐国へ配流される
- ・「学生型」…篁が大学寮の学生となる
- ・「妹型」…篁と妹が交流する

・「婿入型」…篁が身分の高い貴族に婿入りをする

・「冥途型」…篁が冥途と関連する

 A系統…冥官

 B系統…寺社・地藏・閻魔王像を建立

 C系統…菩薩の化身・破軍星

・「足利学校型」…篁が足利学校を創建する

この分類と『篁物語』の内容を照らし合わせると、『篁物語』には「才能型」A系統、「学生型」、「妹型」、「婿入型」の四種類の逸話が見られ、特に「妹型」が物語の主軸となっている。

次に、寛延二年（一七四九）に出版された浮世草子、『小野篁恋釣船』が『篁物語』を撰取している可能性を検討した。『恋釣船』は多田南嶺による著作で、内容は皇位継承にまつわる勸善懲惡物である。この物語には音澄親王と湖照姫という異母兄妹が登場するが、この二人と『篁物語』の篁と妹が次の点で類似している。

- ① 異母兄妹の恋愛
- ② 母親によって二人の関係が断たれる
- ③ 異母妹が自死する
- ④ 異母妹が幽霊になる

これらの展開は他の「妹型」逸話では見られず、『篁物語』にしか描かれていない内容である。

『恋釣船』には、「妹型」以外にも「隠岐配流型」、「才能型」A系統、「冥途型」A・B系統の逸話が挿入されているが、「隠岐配流型」以外は篁本人ではなく、篁方の他の登場人物の行動として描かれる。作者の多田南嶺は、作品の登場人物に実在の役者や文学者の名前を用いる「もじり」を作風としており、本作品の篁方の人物に仮託した篁逸話も「もじり」の一環であると言える。よって、音澄親王と湖照姫の関係にも『篁物語』の篁と

妹の関係が仮託されている蓋然性が高い。

また、南嶺は国学者としても著名で、若い頃から数々の名のある堂上諸家に仕え、国学を学んだ。その堂上家の中には、書陵部蔵本『小野篁集』の外題を記した靈元天皇と密接に関わりを持つ者が複数いる。つまり、南嶺は『篁物語』の内容を知ることができた可能性がある。

以上の考察の結果、『小野篁恋釣船』は『篁物語』に影響を受けて書かれた作品であり、近世以降においても、『篁物語』は多田南嶺の周辺で流布していた可能性がある、という結論に至った。

第二章では、これまでに論じられることが少なかった、篁の「学生型」逸話について考察した。「学生型」逸話は貧しさが強調される場合とそうでない場合に分けられるが、今回は前者における学生像と『うつほ物語』の学生像を比較、検討した。

『うつほ物語』の藤英と『篁物語』の篁の類似は早くから指摘されている。藤英は貧乏学生でありながら、時の最高権力者、源正頼の婿になり、右大弁、式部大輔に上り詰めた人物である。また、『篁物語』の篁も、最終的には右大臣の娘と結婚し、宰相よりも上の位になる。二つの作品は「才能がある苦学生の栄達物語」という点において同じ趣向を持つ。平安時代において、貧しい学生を取り上げた作り物語は他に見えないため、『うつほ物語』と『篁物語』は影響関係にある可能性が高い。

また、藤英は『和漢朗詠集見聞』・『篁山竹林縁起絵巻』に描かれている篁ともいくつかの共通点を持つ。その中に、学生という身分ゆえに他人に笑われる、という描写がある。この描写は『うつほ物語』の中で四回も見られ、藤英の人物像の形成に大きく寄与するが、それが篁逸話でも描かれるのである。そして、これらの作品は「笑われる」藤英と篁を描くことで、設立当初の理念を失った大学寮と墮落した学生を鋭く風刺する、という同

じ趣向を持っている。

以上の点から、『和漢朗詠集見聞』・『篁山竹林縁起絵巻』も『うつほ物語』から影響を受けたと考えられる。したがって、『うつほ物語』の藤英の人物像は、『篁物語』だけでなく、篁の「学生型」逸話に広く影響を与えたことがわかった。

第三章では、『篁物語』の二三番歌「かずならばかからまじや世の中にいとかなしきはしづのをだまき」・二四番歌「いささめにつけしおもひの煙こそみをうき雲となりてはてけれ」を中心に、和歌の役割を検討した。『篁物語』の贈答歌では、基本的に贈歌と答歌の言葉が対応しているが、二三番歌と二四番歌には言葉上の連関がなく、不審とされていた。

そこで、まず、二三番歌・二四番歌の歌意を検討した。特に、二四番歌の解釈は定説を見ていなかったが、一八番歌「いとどしく君がなげきのこがるればやらぬおもひもえまさりけり」を下敷きにしている、という新たな可能性を考察した。一八番歌・二四番歌はともに「火」の縁語を用い、恋の進行と実景の「火」を重ね合わせており、全く異なる場面であらわれていたにもかかわらず、歌の趣旨が極めて類似しているのである。

次に、この贈答歌の物語における位置を考察した。篁は二三番歌で、自分の身分が高ければ、妹が母親に軟禁されるような事態にはならなかったと詠む。一方、妹は二四番歌で、「いささめにつけしおもひの煙」によってわが身をつらく思う、と詠んでいる。一八番歌と二四番歌が対応していることを踏まえれば、二四番歌の「いささめにつけしおもひの煙」は、一八番歌付近の二人の思いが通い合った場面を指すと考えられる。つまり、妹は、篁に自らの思いを告げ、恋を燃え上がらせてしまった「あの時」がこのような事態を招いた原因である、と訴えるのである。よって、この贈答は「妹が軟禁され、二人が引き裂かれてしまった原因」をテーマとして

詠んでいるが、原因に対する二人の認識が異なっているため、言葉の上での連関が消えた、と言える。

続く二五番歌は妹の独詠歌で、妹の孤独感や閉塞感が表される。そして、二六番歌は妹から歌を詠みかける「女からの贈歌」であり、妹から篁への強い思いが示される。どちらも通常時とは異なる形式で和歌を詠むことで、妹の心情を印象付けている。

以上のことから、『篁物語』における和歌、特に二三〜二六番歌の表現や形式は、登場人物の内面を映し出す働きをしている、ということが判明した。

第四章では、『篁物語』の「心」、「身」、「魂」の歌について考察した。

物語は話の進行に従って、「心」から「身」へ、「身」から「魂」へと主想が移り変わる。物語序盤は登場人物の「心」に焦点が当てられ、兵衛佐・妹の恋物語が展開されるが、妹の「心」を篁が手に入れたことで、「心」の物語は一旦終わる。そして中盤、篁の子を身ごもってしまった妹は母親によって軟禁される。妹は徐々に衰弱し、「身」が消えて行く過程が描かれる。そして、自分の「身」が失われることを確信した妹は、「魂」に自らの思いを託し、死してなお篁に寄り添うことを願う。ここで、「心」・「身」の生の世界と「魂」の死の世界が交わっていく。

「心」、「身」、「魂」の歌をそれぞれ見ると、「心」は好意であると同時に生の象徴であり、「魂」は愛情であると同時に死の象徴であり、両者は「身」⇨生死の境界を支点に対照的なものとして描かれていることがわかる。つまり、「心」と「魂」は一見似ているようで、相容れないものである。そして、それは同時に、篁と妹の間に越えられない深い溝があることを物語っている。

以上のことから、「心」、「身」、「魂」の歌は物語を展開させており、生

の世界の篁と死の世界の妹の関係を効果的に描く働きをしている、ということがわかった。

第一章では、『篁物語』は「妹と恋仲になるも、母親に反対され、死別する」という篁の特異なイメージを生み出したことを明らかにした。合わせて、多田南嶺作『小野篁恋釣船』が近世における『篁物語』享受事例と考えられることを指摘した。第二章では、『篁物語』の筆者は『うつほ物語』の藤英の描写を踏襲し、貧しい学生としての篁を造型したことを確認した。第三章では、篁の身分コンプレックスが、妹と気持ちが乖離する一因になったことを述べた。第四章では、「魂」になっても篁を求める妹に対し、同じ気持ちを返せない篁が描かれていることがわかった。

以上の結果を踏まえると、『篁物語』における篁は、他の篁逸話と比較して「弱者」に位置づけられていると言える。物語の篁は財産も地位もなく、恋人が死ぬ様を黙って見ていることしかできない。そのコンプレックスから妹とすれ違い、三君との愛のない結婚に至り、幽霊の妹に恨み言を詠みかけられる。他の逸話での強く、賢く、畏怖される存在として語られる篁とは、全くの別人である。

このように、『篁物語』は、「弱者としての篁」という特異な人物像を描き出した点が、最も大きな特徴となっているのである。

※本論文における『篁物語』の本文は、平林文雄・水府明徳会編著『小野篁集・篁物語の研究』（和泉書院、二〇〇一）所収の彰考館文庫蔵『篁物語』甲本の影印を底本とし、乙本、書陵部蔵『小野篁集』の影印によって、稿者が校正した。

横光利一研究

——モダニズムの問題を中心に——

友 添 太 貴

1、研究目的・研究方法

本論文は横光利一（一八九八～一九四七年）における「モダニズム」の問題について分析・考察を行ったものである。これまで横光利一は独特な比喩や擬人法を用いて前衛的な文体模索を行なった、日本におけるモダニズム文学を代表する作家として評価されてきた。しかし、この評価の中で見落とされてしまいがちなのは、この「モダニズム」という言葉自体がテクストの評価を後ろ楯するものとして、横光の文学活動の総体を捉えづらいうものにしてしまっている側面があることである。

この「モダニズム」という概念は、近代の合理的精神に支えられた近代主義としての「広義のモダニズム」と、一九二〇年頃に登場した文学や美術における前衛的な芸術運動としての「狭義のモダニズム」という二分法で分けることが出来る。便宜的に述べるならば、横光のテクストは「狭義のモダニズム」に含まれるだろう。しかし、モダニズム文学として横光のテクストを分析していく時、それを「広義のモダニズム」と切り離して考察することはできない。広く知られているように「狭義のモダニズム」文学は、ヨーロッパにおいては第一次世界大戦、日本においては関東大震災という破壊的な同時代の状況の中から生まれた。同時に横光が主要な作品を生み出した一九二〇～三〇年代という時代は、都市文化が発達し、明治

以来からの国民国家が一応の成熟をむかえ、帝国が拡大し、世界的な経済市場が成立した時代でもある。つまり「狭義のモダニズム」に属するモダニズム文学を分析する上でも、「近代」という名の下に生み出された近代資本主義とそれに伴う帝国の拡大など、いわゆる「広義のモダニズム」に含まれる事実との不断の連絡なくして、日本におけるモダニズム文学が持ちえた意味を解き明かすことはできないのである。本研究では、このような問題意識の下、横光のテクストを次の二つの観点から考察した。

第一に文化的な日本と西洋との結びつきについてである。ヨーロッパにおいて第一次世界大戦に前後して生まれた前衛芸術運動は、同時代に日本で紹介され、横光の文学活動にもその一端を見いだすことが出来る。ヨーロッパで生まれたこのような芸術運動との交通は、日本の文学者たちの文脈やモチーフに大きな影響を与えたが、そんな中でも詩人や小説家らの文学的な実験を特徴づける重大な要素として、映画の存在を挙げることが出来る。一九二〇年代という時代は、ヨーロッパにおいて映画史を代表する作品が多く製作され、様々な映画理論が提起されるなど、映画が新興芸術としての地位を確立し、文学に大きな影響を与えた時代であった。本研究ではこれまで論じられてこなかった当時のヨーロッパ映画において大きな潮流であったフランス印象主義映画やその映画理論と、横光の文体や文学理論との結びつきを分析した。この分析によって、横光と映画との新たな結びつきを提示するだけでなく、モダニズム文学として横光を語る際にしばしば用いられる、「新感覚派」から「新心理主義」へとという従来の文学史的な枠組みをも問い直した。

第二に近代資本主義や植民地空間の問題についてである。日本におけるモダニズム文学は、大日本帝国による朝鮮半島や台湾などの植民地との関係を抜きに考察することはできない。例えば、フレドリック・ジェイムソンは西洋におけるモダニズムと帝国主義との結びつきを「モダニズムと帝

国主義」(テリー・イーグルトン他著・増渕正史他訳『民族主義・植民地主義と文学』、一九九六年二月、法政大学出版局)のなかで次のように指摘している。ジェイムスンによれば、一見するとモダニズム文学の持つ形式上の革新は、純粋な文体的ないし言語的な特殊性を提示するものであり、政治的内容を何ら喚起するもののように思われぬが、帝国主義のような政治的事柄はモダニズムという用語を適用することが出来る文学の内容と形式双方に明白な足跡を残しているのだという。つまり、一九世紀末から二〇世紀初頭にいたる帝国主義は、そもそも植民地略奪の構造を前提としており、モダニズムの文学的描出が現れるのが、このような状況のなかであるというのだ。このことは、ある側面では日本におけるモダニズム文学に当てはまるものであるが、同時に日本ではよりねじれた関係として現れてくる。図式的ではあるが、西洋においては西洋⇆植民地という対立項のなかでモダニズム文学について考察を行うことが出来るが、日本のモダニズム文学には西洋⇆日本⇆植民地(あるいは西洋⇆植民地)といった複雑かつねじれた関係性が背景にあることを留意しておかなければならないのだ。本研究ではこれらの視点をもとに、特に横光が代表的な作品を生み出した一九二〇〜三〇年代の文学活動に焦点をあて、分析を行った。

2、本論文の構成

修士論文では序章と終章を除き、全体を四章構成とした。以下、各章の梗概である。

第一章「青い石を拾つてから」―「青い大尉」論―横光利一の「朝鮮」―では、横光のはじめの朝鮮体験をもとに執筆され、朝鮮を舞台に書かれたテキスト「青い石を拾つてから」―「青い大尉」の二篇をとりあげ、そこで「朝鮮」という植民地空間がどのように表象されているのかを検討した。

これら二篇において、植民地朝鮮における「日本」や「日本人」がどのような意味を持ち得るのか、そして外地と内地とはいかなるものであるのか、また、植民地朝鮮を描きながら日本語以外描かれないという、テキストの言語を描くその方法のあり方も考察した。

第二章「花園の思想」論―横光利一とフランス印象主義映画―では、これまで指摘されてこなかった「花園の思想」とマルセル・レルビエ監督によるフランス印象主義映画の代表作「エル・ドラドオ」との結びつきを手がかりに、「花園の思想」の執筆の背景やモチーフを実証する。その上で、「花園の思想」の本文の分析を行い、特に末尾の描写に注目をして、テキストの視覚描写と循環的な時間の構造を明らかにする。そのような作業を通して、ドイツ表現主義映画との関わりが強いとされてきた横光や「新感覚派」の文学者たちにおける、フランス印象主義映画との新たな結びつきを提示した。

第三章「横光利一における「リズム」―詩論・映画そして形式主義文学論争―」では、横光が文壇登場直後から一貫してエッセイや評論の中で発言し続けた「リズム」という言葉に注目した。そして、早い時期から強い関心を持っていた詩や詩論が横光の文学理論における「リズム」という概念に及ぼした影響を実証する。その上で、第二章で明らかにしたフランス印象主義映画と横光との関係を踏まえ、形式主義文学論争で横光が展開した文学理論のバックボーンに詩や詩論と同時に、フランス印象主義映画の映画理論が存在したことを示し、横光の文学理論において「リズム」という概念が持ち得た意義と変遷を明らかにした。

第四章「上海」論―言語と言語のあいだで―では、第一章での分析を踏まえながら横光の代表的なテキストである「上海」を論じていく。列強諸国の力がひしめき合う国際海港都市上海を舞台として執筆された「上海」は、しばしば国籍や人種、国家などをはじめとしたテキストの「国際

性」が問題とされてきた。しかし同時に先行研究では、そこで話される言語の存在は問題とせずに論じられてきた。本章では『上海』において「英語」や「支那語」などの諸言語が日本語の文章の中でいかに描かれ、いかなる作用を生み出しているのかを分析する。その上で、テクストにおいて様々な社会的な関係性の中にある登場人物達を、言語差異の中でどのように位置付けることができるのかを示した。

3、結論

日本のモダニズム文学（ここでは「狭義のモダニズム」「広義のモダニズム」双方が含まれる）が抱えた問題は煎じ詰めれば、近代に日本が抱え込まなければならなかった両義性——すなわち西洋によって植民地化される人びとに属さねばならない非西洋圏の国でありながら、同時に一応の近代化に成功し、帝国主義の道を進んでいった国という両義性に見出すことが出来る。そしてそれが最も顕著に現れるのが、本研究で考察した日本における西洋との前衛芸術の結びつきと、帝国による植民地支配の問題を同時に抱え込んだ横光のテクストに他ならなかったのである。

横光は一九三〇年代後半から、「日本回帰」という形で急激に右傾化していく。従来の研究ではこのような横光のモダニズム文学から「日本回帰」へとという変遷を検討せずに研究が進められてきた。しかし、本研究での分析をもとにすれば、横光のモダニズム文学としての特質と「日本回帰」との間の本質的な結びつきを明らかにする糸口をつかむことが出来るのではないだろうか。例えば、一九三〇年代のヨーロッパにおいて、前衛的な文體改革を試みた詩人たちが容易にファシズムと接続していったという事実が存在する。確かに、日中戦争以後の「日本回帰」的傾向と、ヨーロッパにおけるファシズムとを同一視する視点は正当なものではないかもしれな

い。しかし、本論文で分析した前衛的な文體と帝国主義による植民地支配の問題が結びついたモダニズム文学としての横光のテクストの中にこそ、「日本回帰」と接続してしまった必然性を見出すことも出来るのではないだろうか。形式的な文體改革や文学的実験によって純粹に芸術性を追求するモダニズム文学がファシズムや全体主義のようなネガティブな政治的要素を引き寄せ「日本回帰」という結果を招いてしまう。つまり、横光利一において「モダニズム」と「日本回帰」が結びつくところには、一体何が起きていたのか。それが、本研究の先に開示される問いでもある。

江湖詩社と柏木如亭

藤 富 史 花

本論文では、江戸後期に活躍した漢詩結社、江湖詩社の詩人たちによる出版活動や社友間の交友について、江湖詩社を代表する詩人の一人である柏木如亭を中心に調査・考察した。

第一章 如亭の羈旅詩―詩語「天涯」の用例を中心に―

如亭はその半生を遊歴生活の中で過ごした放浪の詩人であり、羈旅詩が多い。その中でも、望郷の念を詠じた詩や旅暮らしの寄る辺なさを託った詩にたびたび「天涯」という語が見える。「天涯」は、天のはて、つまり極めて遠い場所を指す語であるが、如亭の羈旅詩において用いられる「天涯」は、単に遠方を指すだけでない意味を含んでいると考えられる。

如亭がどのような意味で「天涯」を用いていたか明らかにするため、まず高橋明郎氏の論考をもとに、唐宋の用例を確認しつつ「天涯」の用法の変遷について整理した。高橋氏は、唐になると「天涯」は「自分で望まない事情によって居住・滞在を余儀なくされた遠隔地（貶地、僻地）を指す」言葉としても用いられ、特に杜甫と白居易はこの用法で「天涯」を好んで用いたと指摘する。そのことを踏まえ、白居易の「琵琶行」の「同じく是れ天涯淪落の人」という句が広く知られて以降、「天涯」は「淪落」「零落」「流落」などの落魄を意味する語と結びつけて用いられるようになったこ

とを確認した。

これらを踏まえて如亭詩の「天涯」の用例を確認し、如亭が「天涯」というときは、故郷から離れた地を旅する自分がいる場所を指しており、望郷の念があることを確認した。さらに、古文辞格調派の詩人服部南郭と龍草廬、如亭と同じ江湖詩社の詩人大窪詩仏、如亭の後輩詩人の梁川星巖と、如亭の「天涯」の用例を比較しつつ、如亭にとって「天涯」は、近世後期の日本に特有の職業文人の「遊歴」という生活形態と、その遊歴生活の中で培われた精読・熟読という詩文の鑑賞態度、また如亭が繰り返し読んだ『唐宋千家聯珠詩格』に載る「天涯」の用例や、漂泊の境涯にある自分自身と向き合う時間や望郷の念といったものが結びつき、故郷から遠く離れた自分のいる場所を指す言葉として認識されていた、実感の籠った語であったことを考察した。

第二章 江湖詩社による宋詩選集刊行について

それまで詩壇を席捲していた古文辞格調派が唐詩を重んじていたのに対し、江湖詩社の詩人たちは、宋詩を推重してその鼓吹に努めた。宋詩の中でも特に南宋三大家を重視し、陸游・楊万里・范成大の詩を選んで一冊に編んだ選集を相次いで刊行した。また、南宋三大家の和刻本の刊行も選集と同時期に行っている。この章で特に取り上げたのは『放翁先生詩鈔』（享和元年刊）、『石湖先生詩鈔』（文化元年刊）、『楊誠齋詩鈔』（文化五年刊）、『宋三大家絶句』（享和三年刊）、『三家妙絶』（文化四年刊）、『宋三大家律詩』（文化八年刊）、『広三大家絶句』（文化九年刊）、『宋三大家絶句箋解』（文化九年刊）の八つである。

これら宋詩選集の刊行については、広瀬淡窓が「詩ノ妙ハ絶句ニアリト称シ、古今ノ詩集ヲ抄録スルニモ、七絶ノミヲ取りテ世ニ行フ。但相手ノ

多クシテ、其書ノ行ハレ易カラシクトヲ冀フナリ。識趣鄙陋ナリト謂フベシ」(『淡窓詩話』明治十五年刊)と批判する。しかし、それらに付された序跋を見ると、格調派の遺風を一掃しようとする狙いや、格調派を象徴する『唐詩選』に代わり、性霊派の詩論を代表させるような宋詩の選集を世に出そうとする意図が窺えた。また、宋詩選集は詩を学ぶ人々にとって入門書としても位置付けられていた。『宋三大家絶句』に続き、南宋三大家の七絶三百首を収める同一の形式の選集が『三家妙絶』、『広三大家絶句』と繰り返し刊行されているのは『宋三大家絶句』がベストセラーとなったため、その二匹目、三匹目の泥鰌を狙わんとする商売心も少なからず手伝っていたと考えられ、広瀬淡窓が指摘する「識趣鄙陋」な側面がある。ことは否定できない。しかし、この一連の出版によってそれまであまり顧みられなかった宋詩が簡便な形で人々に供され、広く読まれたことの意義は評価されるべきである。

また、宋詩選集に採録された南宋三大家の詩と、南宋三大家の和刻本に収録されている詩とを対照すると、すでに南宋三大家の和刻本に採録されている詩は、基本的に宋詩選集に採られておらず、両者の間に重複がないように注意を払って宋詩選集に採録する詩を選んでいたことがわかった。南宋三大家の和刻本と、宋詩選集は読者に併読されることが前提とされており、採録する詩のバランスを考えて重複がないように配慮し、南宋三大家の詩を一首でも多く読者に示そうとしていたと考えられる。その意図や編集方針も評価されるべきであろう。

また、これら一連の宋詩選集刊行の中心にいた江湖詩社の人物たちが、宋詩選集中の詩からどのような影響を受け、自身の実作に反映していたかを示す例として、菊池五山の詩文を挙げた。五山は『宋三大家絶句』に採録されている陸游の「冬夜雨を聴き戯れに作る二首」其の二の句を、自身の詩や江湖詩社の社友の詩集(『淡齋百絶』文化六年刊)に寄せた序文に

おいて用いている。この例から、五山をはじめとする江湖詩社の社友たちが、宋詩選集に収める詩に平生親しんでおり自家薬籠中の物としていたことを確認した。

第三章 江湖詩社社友の交流

— 菊池五山・宮澤雲山・柏木如亭を中心に —

菊池五山・宮澤雲山・柏木如亭の三人を中心に、江湖詩社の社友たちの交流がどのようなものであったかを考察した。

まず菊池五山と宮澤雲山の交流であるが、雲山は「江湖社裡の小無絃(無絃は五山の字)」と自称するほどに五山に傾倒しており、二人の交流の様はしばしば『五山堂詩話』に見られる。

また、『細庵百絶』(文化七年刊)に収める「秋暁」と題する次の詩と、

欲償課詩前夜債 課詩 前夜の債を償はんと欲し

起來尋句曉霜中 起來 句を尋ぬ 曉霜の中

梅花未綻菊先老 梅花未だ綻びざるに 菊先づ老ゆ

此際吟人窮更窮 此の際 吟人の窮更に窮まる

『五山堂詩話』巻六(文化九年刊)にある次の記事を引いて、

詩は情の由つて発する所、苟も興ずる所無ければ則ち一月作らざるも可なり。境致一たび到れば則ち一日に幾篇を累ぬるも亦た多きと為さず。若し必ず詩を以て課と為さば則ち性靈を天闕し、才情を極枯す。粗率牽強の病も亦た随つて生ず。一の冬烘先生有り。日に七律一首を課す。除夕客至る。先生方に盛んに燭を張り端座して詩を思ふ。

客其の故を問ふ。先生曰く、今年の詩什、課数に足らず。今夕償還して以て勾帳せんと要するのみ。吁愚も亦た甚し。

一日に詠むべき詩の数を割り当てており、その結果詩が出来ずに苦しむ人物の滑稽な姿を描いているという共通点があることを確認した。また、五山と雲山はこのような人物への批判的視線を共有していた可能性がある。

続いて、雲山の「秋暁」詩の結句が踏まえる北宋、欧陽脩の「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり。然らば則ち詩の能く人を窮せしむるに非ず。殆んど窮する者にして後に工なるなり」(「梅聖俞詩集序」という言を、他の江湖詩社の詩人たちもしばしば用いていることを例を挙げて示した。江湖詩社の詩人たちが「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり」という欧陽脩の言を詩文にしばしば用いたことの背景には、ここで例として挙げた江湖詩社の詩人たちに、落魄して地方を流浪していた期間を有するという共通点があることを指摘した。「窮」の経験を有する江湖詩社の詩人たちにとって、欧陽脩の「愈いよ窮すれば則ち愈いよ工なり」という言辭は、単に古人の名言という域を超えて、自身の「窮」の経験と一体となつて深く内面化されていたであろう。

最後に、雲山と如亭の交流を取り上げた。この二人の直接の交流を示す資料は今のところほとんど見出せないが、雲山が髪を下ろした際に詠んだ次の七絶がある。

無用衰翁是散髻

薙除頭髮野僧如

鬚髻且免梳霜累

遮莫人呼作秃驢

無用の衰翁 是れ散髻

頭髮を薙り除きて野僧の如し

鬚髻ひげくま且かつ免はな梳か霜しも累づみ

遮さ莫な人ひとの呼よびて秃は驢ろと作なすに

〔薙髮〕写本『雲山居詩抄』

そして、雲山の詩は如亭が剃髪したときにその感慨を詠じた次のような詩を踏まえていることを指摘した。

| | |
|---------|---|
| 頭髮除來恰歲除 | 頭髮 除き来つて恰も歳除く |
| 明朝且喜不須梳 | 明朝 且 <small>かつ</small> 喜 <small>よろこ</small> ぶ <small>こと</small> 梳 <small>か</small> を <small>も</small> 須 <small>も</small> む <small>ぎ</small> ざるを |
| 腰間欠久新磨劍 | 腰間 欠くこと久し新磨の劍 |
| 籠底焚空舊妓書 | 籠底 焚き空しうす 旧妓の書 |
| 守歲燈寒遊子樣 | 歳を守る燈は寒し 遊子の樣 |
| 迎春羹冷野僧如 | 春を迎へる羹は冷やかにして 野僧の如し |
| 胸前俠氣初銷盡 | 胸前の俠氣 初めて銷し尽く |
| 從客罵來呼秃驢 | 從 <small>ま</small> 客 <small>きやく</small> 罵 <small>のの</small> り <small>來</small> つ <small>て</small> 秃 <small>は</small> 驢 <small>ろ</small> と <small>呼</small> ぶ <small>に</small> |

〔壬戌除夕、髪を下して戯れに題す〕『如亭山人藁初集』

また、雲山は剃髪した翌年に京都に遊歴し、如亭の墓の苔を掃っており、その際には「如亭翁墓」(『三雲集』)という七絶を詠じたことを紹介した。これらを踏まえて、江湖詩社の先輩というだけでなく、自身と同じく烟花の癖を有し、また遊歴を事とし四方に漂泊して旅の中で死んでいった流浪の詩人如亭の姿を、雲山は自身に近しいものとして、あるいは自分自身の姿と重ねながら折に触れて思い返していた可能性を指摘した。

注

(1) 高橋明郎「天空への視線 天涯」(後藤秋正・松本肇編『詩語のイメー ジ唐詩を読むために』(東方書店、平成十二年)所収)